

# ケイジャン神話とケイト・シヨパンのカディアン

宇津 まり子  
(人文社会科学部)

山形大学紀要（人文科学）第19巻第2号別刷  
平成31年（2019）2月

# ケイジャン神話とケイト・ショパンのカディアン

宇津 まり子

(人文社会科学部)

はじめに

ケイト・ショパンの代表作の一つである"At the 'Cadian Ball"の「カディアン」は、現在ケイジャンと呼ばれる人々を指す<sup>1</sup>。1755年にイギリスによって現在のカナダ、ノヴァスコシア周辺の地から追われ、離散した人々のうち、1764年頃からスペイン統治期のルイジアナに移住してきた人々の子孫だ。ショパン作品でカディアンに関する語をタイトルに付しているのは、他には"A Night in Acadie"のみだが、彼女のジャンルであるルイジアナの地方色を担う代表的な人々の一つとして、様々な作品に登場している。

カディアンと共に、ルイジアナ地方色のもう一つの柱となっているのが「クレオール」である。「クレオール」は元々、ヨーロッパ生まれの植民者と「現地生まれ」を区別したもので、人種を示す言葉ではなかった。しかし19世紀前半には白人のみに使われ、後半になると有色もクレオールを名乗り始めるなど複雑に変遷し、現在では有色の人々を指す言葉として定着している (Brasseaux et al. loc. 38-54)。ショパン研究においては、「1870年代には、『クレオール』は新世界生まれで、フランスとスペインの血を純粋に引く白人を意味した」(Toth 64)との理解が一般的であり、本稿でも概ねこの意味で用いている。

クレオールもケイジャンも、共にフランス系でフランス語を話し、カトリックを信仰したという共通点を持つ。ショパンの表象するこの2グループで大きく異なるのは、それぞれの社会階層だ。上に見たように、クレオールには人種的な混乱が生じていたことを踏まえ、エルフェンバインは「ケイジャンやクレオールを描く際に、ショパンが人種の問題に注意を向けようとするのは稀だが、2グループ [それぞれ] の下降・上昇移動についてはしきりに描いて見せている」(Elfenbein 120)と指摘している。他方、シェイカーはショパンによるこの2グループの表象を以下のように捉えている。

ショパンにとって「地元民を色づける」ということは、クレオールやケイジャンは混血

---

<sup>1</sup> 'Cadianの発音について、ヒーバート・ライターは"Ca'jin"と示している (Hebert-Leiter 5) が、日本語では元となるAcadianを「アカディアン」と書くことが多いため、本稿では「カディアン」とした。また、彼らの多く住む地域「アカディアナ」が命名されるのは1971年だが、地域全体に言及する便宜上、本稿でもこの語を用いている。

だとするルイジアナ外での一般的理解を、「純粋な」白人だと改めることを意味した。……ショパンが『ユース・コンパニオン』誌に載せた作品の大半は、クレオールを専ら白人のフランス系上流階級の子孫として描き、ケイジャンはいわば彼らの「田舎のいとこ」として描かれている。(Shaker xii)

クレオールとケイジャンの人種的混乱に対するショパンの反応については多少の違いを見せつつも、2グループの階級的相違については両者の見解はほぼ一致していると言えるだろう。

しかし、同じフランス系の白人の二民族が、それぞれの枠内に階級分化を見るのではなく、民族の境界線が階級の境界線と重なるということが可能なのだろうか。本稿では、この謎解きを試みたい。

#### ケイジャンの神話と現実

ケイジャン・ブランドのパスポートに乗ってケイジャン・ブランドの餌で釣り、獲物はケイジャン・ブランドの水で満たしたケイジャン・ブランドのアイスボックスに入れることができる時代になった。(Ancelet 1243)

現在でこそ、ルイジアナのワイルドな湿地を体現するアイコンとなり、ケイジャン・ミュージックやケイジャン料理で世界中から観光客を引き寄せる大きな観光資源になっている彼らだが、20世紀初頭の状況は厳しいものだった。第一次世界大戦が近づき、T・ルーズベルト大統領が牽引するナショナリズムが高揚していく中、ルイジアナでは1916年に英語での教育が義務化された。教室でフランス語を使用すれば罰せられるため、手洗いにいく許可を求められることすらできずに、恥ずかしい思いをさせられる子どもたちもいたという (Ancelet 1240)。1957年公開の映画*Bayou*が、湿地の地理的ドキュメンタリーを思わせるタイトルでは売れず、3年後に*Poor White Trash*と改題して大ヒットになったというエピソードが、一般的なケイジャンのイメージを物語っていると言える (Knipfel)。言語・文化の剥奪や否定が生み出す劣等感とは、第二次世界大戦時にフランス語が任務のツールとなり、戦地でのサバイバルの糧となった経験からようやく変化していくが、ルイジアナが学校教育にフランス語を取り入れるのは1960年代末のこと、ケイジャンや有色クレオールの研究が制度化されていくのは70年代半ばのことである (Ancelet 1241, 1247)<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> アンスレーは制度化の具体例として、ルイジアナ大学ラファイエット校におけるCenter for Louisiana Studies (1973年)、Center for Acadian and Creole Folklore (1974年) の設立をあげている。

制度的な学問対象となるのが遅かったこともあり、ケイジャンの歴史や文化は長らく誤って理解されてきた。1880年から1980年代まで1世紀に及ぶ雑誌記事、学術論文、事典を広く検証し、ケイジャンがどのように説明されているかを分析したエスタヴィルは、この誤解を「不変のケイジャン神話」(Estaville 139)と呼び、大きく2つの特徴を見ている。19世紀というアメリカの激動期を、ケイジャンたちは田園地帯に孤立して平穏に生活し、何一つその影響は受けなかったというのが一つである。孤立性や排他性の主張とは矛盾しつつ、南ルイジアナのケイジャン文化は100年以上に渡って、後から来た全ての人々を同化し、自身は何ら変化しなかったというのが二つ目だ(117)。大衆レベルでの理解にとどまらず、これが学問的にも蔓延ってしまった源として、エスタヴィルは1930年代の社会学者による論文3点を同定し、彼らの信頼性に乏しい調査や議論が、続く世代の28名の学者のうち23名にそのまま踏襲されていたことを突き止めている(119-25)。

しかし、ケイジャンの19世紀の実態は全く異なるものだった。ルイジアナ購入、州への昇格、南北戦争、再建期といった大きな政治的变化に加え、蒸気船、鉄道、電報、電話、農機具などの技術革新が一気に押し寄せたのが19世紀だった。バイユーが縦横に走るアカディアナの地の利の良さは、蒸気船の登場で更に利便性を増し、豊富な農産物や家畜の流通、人の往來を増幅させた。1830年代に登場する鉄道がこれに拍車をかけ、アカディアナは人種的にも階級的にも実に多様性に富む地域になっていた(Estaville 126-27)。地域の繁栄である以上、その恩恵はもちろんアカディアンにも及んでおり、例えばアカディアン・コーストの4パリッシュの平均では、アカディアン人口の18.5%が1860年にはプランター階級に上り詰めていた(Brasseaux 156)。

状況を一転させたのが南北戦争だった。働き手を失った地域の道路や畑は荒れ果て、沈んだ橋や船が河川の往來を阻み、家や農機具の多くは破壊されていた。再建を目指すにも、資金借入れの担保でもあった奴隷はもはやおらず、荒廃し、価格の下落した不動産もその代わりにはならなかった。ミシシッピ川沿いの地域では毎年のように洪水が発生し、中でも、1866年にバトン・ルージュ北で起こった洪水は、最大で幅80km、全長160kmと、1927年のミシシッピ大洪水に匹敵する規模に達した。地域の経済的繁栄の象徴でもあった砂糖生産は、1861年のピーク時には26万9千トンだったが、1864年には5,400トンに急落している(Brasseaux 75-78)。このような状況の下、上に見た平均18.5%のプランター率は、1870年には2.25%まで落ち込んでいる(Brasseaux 156)。

経済的荒廃は当然ながら下層にも及び、全白人世帯の54%、アカディアン世帯に限定する

<sup>3</sup> ブラッソーの付録資料参照。パリッシュごと、民族ごとに示された土地所有のない人々の割合を平均した数値である("Table 5. Landless Acadian Households, 1870" (158), "Table 13. Landless Whites in the Acadian Parishes, 1870" (166))。

と58%が、土地所有のない階層に落ちていた<sup>3</sup>。そしてこの階層に対して、新聞、雑誌、書籍といったメディアがこぞって「プア・ホワイト」のラベリングをしていく。以下は、1873年の*Galaxy*誌に紹介された石版画家A. R. ウォードの言葉である。

これら原始的な人々は、カナダからルイジアナに移住したフランス人の子孫である。内婚を繰り返し、社会の低層に定着してしまった。活力もなく、教育も野心もなく、彼らはホワイト・トラッシュの典型であり、全ての面において時代に取り残されている。この辺りのパリッシュに住む白人の多数はかなりの無知だが、彼らの無知さは凄まじい。彼らがいかに軽蔑されているかは、黒人が自分たちの仲間に軽蔑を示す時に、アカディアン・ニガーと呼ぶほどだ。(qtd. in Brasseaux 101)

アカディアナの人口は半分ほどが黒人、残りの半分弱はアカディアン13%、クレオール13%、アングロ17%、フランス人移民2%で構成されており<sup>4</sup>、上に見たように、下層もアカディアンに大きく偏っていた訳ではない。それにも関わらず、このまとまりが「ケイジャン」と呼ばれていくのには、複雑な事情が存在した。まず、アカディアナの支配層は当初は白人クレオールであり、アメリカ人移住者が膨れ上がるにつれて、1840年代までにはアングロ支配が確定したということである。例えば1840年代のバトン・ルージュでは、*Gazette*紙、続いて教会の説教が英語のみとなっており (Brasseaux 93-95)、経済的、教育的にアメリカ化の資力を持ったフランス語話者たちは、この時期までにメインストリームに吸収されるという形で消え始めたことを示している。ルイジアナ購入時からあったフランコフォビアが、1850年代のネイティビズムの波の中で容赦ない攻撃へと変わったことも、この動きを後押しした。

そして、南北戦争後の経済的荒廃は貧困層の人々そのものをも変えていった。土地の喪失は、小作農としての生活の始まりを意味し、戦前の民族ごとのコミュニティを崩壊させた。同じ様な経済状況に置かれたアカディアン、クレオール、フランス移民、そしてアングロが、近接あるいは混在して生活するようになり、外婚が急増した。こうして形成されていくのが、ブラッソーが「ケイジャン・アマルガム」(Brasseaux 106, 109) と呼ぶ集団であり、私たちが今日ケイジャンとして認識している人々と文化の源である。外婚はアカディアン文化にクレオールやヨーロッパの民話、音楽、料理を導入し、多様だったフランス語も均質化されて、「アカディアン・フレンチ、クレオール・フレンチ、19世紀のスタンダード・フレンチ、

<sup>4</sup> ブラッソーの付録資料参照。パリッシュごとに示された割合を平均した数値である ("Table 10. Acadians and Anglo-Americans in Acadiana, 1870" (163), "Table 14. Acadians and White Creoles in Acadiana, 1870" (167), "Table 24. Acadian and Black Populations of the Acadian Parishes, 1870" (180), "Table 15. Acadians and Nineteenth-Century French Immigrants in Acadiana, 1870" (168))。

そして英語からも語彙を引いたハイブリッド言語」であるケイジャン・フレンチが、20世紀初頭までにはアカディアナの下層階級のリング・フランカになっている(109)。南北戦争後に量産された、上に引用したウォードに類する言説はこの人々を標的としているが、その呼称は「時にクレオール、時にケイジャン」(110)と20世紀初頭まで揺れていた。最終的に「ケイジャン」となるのは、クレオールが有色の人々として定着していくためであろう。ネイグルは、1916年に発表されたアリス・ダンバー・ネルソンの論文が既にこの語を有色の人々に限定して使用していることを指摘している(Nagel loc. 307-08)。

こうして民族の一貫性を保持しているように見せながら、実際には貧困を共通項として複数の民族がまとめ上げられ、創出されたのがケイジャンである。「不変のケイジャン神話」とは全く異なり、地理的孤立も排他性もない。強靱な同化力とされてきたものも、経済的に同じレベルに置かれた人々の生活や文化の共通性の、そして権力側が自分たちの目に映るまとまりを、軽蔑を込めて「ケイジャン」と呼び続けたことの結果に過ぎないと言えるだろう。

#### ショパンのカディアン

アカディアナの下層がまとめられ、ブア・ホワイトを含意する「ケイジャン」として作り出されていく南北戦争から20世紀初頭の過渡期は、ケイト・ショパンの時代に合致する。彼女がルイジアナに移住したのは南北戦争終結から5年後、ニューオーリンズに9年、アカディアナの北に位置するナキトッシュに5年ほど暮らし、1884年にセントルイスに戻った。そこからの短い作家人生で、中編2作、短編では100作以上を遺した。過渡期であることを反映して、アカディアン、カディアン、ケイジャンと、様々な表現を用いている。地域や言語のみを指すものは除き、人物と関連づけられて使用されているものに限定すると、その数は16作品になる<sup>5</sup>。

これらの作品から、ショパンのカディアン表象の特徴を検討したい。代表作の「カディアンの舞踏会で」は、「ブビノ、あの大柄で茶色く、人の良いブビノは、キャリスタが行くのは知っていたが、舞踏会に行くつもりはなかった」(219)と始まる。ブビノが恋しているキャリスタは、クレオール・プランターのアルセーに惹かれているが、外見からして恋敵は「ハ

<sup>5</sup> 個人としての輪郭のある人物から全くそうではない人物まで混在するが、以下の16作品である。"Boulôt and Boulotte" (1891), "At the 'Cadian Ball'" (1892), "Loka" (1892), "Caline" (1893), "In and Out of Old Natchitoches" (1893), "In Sabine" (1893), "A Gentleman of Bayou Têche" (1894), "Azélie" (1894), "Mamouche" (1894), "A Dresden Lady in Dixie" (1895), "Polydore" (1896), "A Night in Acadie" (1897), *The Awakening* (1899), "A Vocation and a Voice" (1902), "Charlie" (1969), "Ti Démon" (1969)。例えば「カディアンの舞踏会で」のブビノは続編の「嵐」にも登場するが、後者では民族は特定されていない。このように複数の作品に共通する人物があり、全ての作品で民族が明かされる訳ではないため、カディアン作品がこれらに限定されるものではないことは断っておく。



ンサムな目」, 対して彼自身は「冴えず, ぎこちない」(223)と対照される。アルセーに捨てられて初めてキャリスタは彼の方を向くという屈辱的なプロットなのだが, その時のズビノは「突然, あふれるような幸福感が, 若いアカディアンの疲れた顔に光った。嬉しさで, 彼は話すこともできなかった」(226)と描写される。続編の"The Storm"では, ようやく勝ち取ったキャリスタを結局はアルセーに寝取られる。愚かしさにも近接するような素朴さ, 街いのなさ, そしてそれが生み出す笑いの要素がズビノには込められている。

同様の書き込みは女性にも見られ, "Caline"がその好例だ。干し草の陰で昼寝をしていたキャリーヌは, 止まるはずのない列車が止まったため目を覚まし, 様々に着飾った都会の人々を目にする。中に絵描きがおり, キャリーヌの顔をスケッチするが, 列車の不具合が直るとともに去っていく。都会に行きたい気持ちを抑えることができなくなったキャリーヌは, 知り合いを頼って仕事を見つけ, 町で生活を始めるが, しばらくしてようやく自分が求めていたのは都会ではなく, あの絵描きだったことに気がつく。自分の恋愛感情に気づくのに長い時間を要するような無垢さ, 純粹さは, 女性人物の場合には積極的に評価される長所でもあり, キャリーヌは町のハンサムな肉屋に「かわいいアカディアンの女の子」と呼ばれ, おまけまでしてもらおうような魅力的な人物として描かれている(248)。年老いた独身の医師が浮浪児を養子にすることを決意する"Mamouche"でも, 医師の決断の決め手になっているのは, 若かりし頃に恋した「かわいいアカディアンの女の子」(270)がマムーシュの祖母だったという事実である。

無垢さ, 純粹さ, 朴訥さといったものは, 言葉を変えれば無知さでもある。プランターの家に滞在している写真家が, カディアン男性の写真を撮ることを希望し, そこにどのようなキャプションを入れるのかを巡って展開する"A Gentleman of Bayou Têche"では, 娘は屋敷の黒人使用人に知恵を求め, 「あの人たちは写真の下にこう書くんだよ。『これがバイユー・テシュの卑しいケイジャンの一人だ』ってね」(320)と教えられている。年齢の違いもあるが, 無知さというステレオタイプの強い黒人の更に下に位置づけられている。家庭内暴力を受けている妻を, 偶然の訪問者が助けるという物語である"In Sabine"でも, 暴力夫はカディアンの妻を評して, 「ケイジャンってのはこうなんだ……白人男性が目の前にいても分からないんだ」(327)と, 目上の者に対する適切な振る舞いができない妻の言動を非難している。全ショパン作品を通じて「ケイジャン」の呼称が使われるのは, この2カ所のみである。黒人使用人は, 部外者の見たカディアン像を想像してこの語を用い, 暴力夫は自身が「テキサス人」(326)であり, 外部からの視線というものが両者に共通している。

カディアンであることが明記される人物には, プランターのような極度に裕福な人物はいない。浮浪児であるマムーシュが底辺にいることは明らかだが, キャリーヌが両親と共に住んでいた家は「丸太小屋」(246), 「サビーンにて」で舞台となる夫婦の家は「一間しかなく,

極度に家具が少なかった。安っぽいベッド、マツ材のテーブルが1つ、椅子が幾つか。それだけだ」(328)と描写される。「バイユー・テシュのジェントルマン」でも、カディアンの父娘の暮らす家は、「低い、質素な二間の小屋で、ハレ邸の黒人居所ほどの快適さもない」(319)と描かれている。しかし、貧困状態とは言えないカディアンも存在しており、ブビノとキャリスタが築いた家庭が描かれる「嵐」では、「今晚はシルヴィーが手伝いに来てくれているかもしれないから大丈夫」という会話があり、家に一人残された妻を思いやったブビノが「キャリスタの好きなエビの缶詰を買う」(592)など、ある程度の余裕を感じさせる。「アカディーでの一夜」の主人公テレスフォールも、身につけているのは既製服だが、「内心、彼のスタイリッシュな外見に憤りつつ、周りの男たちは彼を疑い深い目で見た」(491)というほど、周囲との差が強調されている。

ケイジャンが決定的に理解不能なプア・ホワイトの他者として形成されていく時代であることは上に見たが、ショパンにはその傾向は見られない。"Ti Démon"は、赤ん坊の頃に泣き声があまりに大きかったため、母親から「小さい悪魔」とあだ名された男の話である。温厚な男に成長したが、友人に騙されて婚約者を奪われそうになり、酒の勢いも手伝って、相手が気を失うほどの暴力を振るってしまう。その一度きりの行為のために、結婚の機会を失い、暴力を語り続ける人々の声によって「悪魔」という名が改めて構築されていく。ティ・デモンの凄まじい暴力は確かに描かれるが、フィアンセへの献身や友人の誘いの詳細が描写されており、作品の主眼は、彼の暴力よりもそれを引き起こした一瞬の歯車の狂いや、人々の語りの権力の方に向けられている。

作品を見る限り、当時のアカディアナの経済状況に照らして、ショパンがカディアンを極度に貧困化し、あるいは他者化して描いていたとは言えない。それにも関わらず、クレオールの上層性とケイジャンの下層性という批評上の前提が形成されているのには、ショパン批評が確立された時期が大きく影響していると思われる。1904年に死亡したショパンは、その後長らく忘れられ、1970年代のフェミニズムによる*The Awakening*の再発見を経て、作家研究が確立した。この時代までには、ケイジャンがプア・ホワイトとして定着していたことは、映画『プア・ホワイト・トラッシュ』の例をあげて前章で見た通りである。アンスレーがケイジャン研究の制度化の萌芽を見たのが70年代前半、根強い「不変のケイジャン神話」が蔓延していることをエスタヴィルが明らかにしたのが1987年、19世紀のアカディアンの歴史をブラッソーが世に出したのは1992年である。ショパン研究は、その始動までに出来上がっていたケイジャンのステレオタイプを保持し続けていると思われるのだ。

例えば、16作品に含まれる"Azélie"では、主人公の少女アゼリーは、家に食べる物がなく、プランテーション内の売店に姿を現しては付けで様々なものを手に入れようとし、断られたものを得るため、夜を待って盗みに入るほどの貧困状態にある。売店の男はプランターに、



「もう付けで売るのはやめた方が良いのではないか……あの作物の様子では払える訳がないし、あなたがあのくだらない川住まいの団をこの場所に住まわせておく理由が分からない」と意見し、プランターも「今はここにいるんだから飢えさせる訳にはいかない。できる限りの仕事をさせる。必要でない物はやるな。そして来年は誰か別のの人に彼らを食わせる特権を楽しんでもらおう」(292)と本心を明かしている。少女アゼリーを、批評家のウォーカーは「貧しく怠惰なケイジャン小作の娘」(Walker 179)と評しているが、この作品で用いられる「カディアン」という語は、彼女や彼女の家族を指しているとは厳密には言えないのである。

「父さんには食べさせなくちゃいけない人がたくさんいる。畑のために人を雇わなくちゃいけないし、食べさせなくちゃいけない。彼らもそれを当然と思ってる。おばあちゃんもいるし、[弟の] ソウトレールも私も…。」

「それから、コーヒーポットはいつも暖炉の端にあるもんだと知ってる、国中の怠け者カディアン全員な。」(290)

払える見込みのない付けを求め、恥じ入る態度も見せないアゼリーに対し、売店の男が、彼女と同じカディアンの凶々しさを口にして当てこすったとも考えられる一方、ただ単に父の所に働きに来ている人々にカディアンが多かったのだとも解釈でき、決定は不可能である。

同様の「推測」は、16作品に含まれない"A Rude Awakening"にも見られる。貧しいボルドン家の物語を説明し、シェイカーは「ボルドン家の民族をショパンは明示していない」と断りながらも、「父親の労働者階級の地位、娘の茶色の肌とカールした黒い髪、フランス語の語彙と文章構造に地域の黒人英語を混在させた非標準的な方言によって、ケイジャンとしてコードづけされている」(47)と説明している。シェイカーはまた、上述の「マムーシュ」に登場する医師ジョン＝ルイスについても、「ヨーロッパ系の名前、医師という職業、快適な生活、不動産所有、そして若い頃は赤毛だったとされ……明らかに白人とされており、クレオールであるとは明示されていないが、そのように示されている」(79)と解釈している。しかし、混血の集団である「ケイジャン・アマルガム」が茶色の目と髪をいつまでも保持しているとは考えにくく、仮に外見を根拠とするなら、医師の赤毛はフランス、スペイン系のクレオールの特徴ではない。言語もまた民族の違いの指標になるかどうかは疑わしい。ブラッソー他は、言語学的には「クレオールはフランス語と西アフリカの言語的要素を併せ持つハイブリット言語」で、「クレオール話者は様々に異なる民族的、人種的背景を持ちうる」が、事は極めて複雑であり、「白人でも黒人でも、自らをクレオールと自認する多くの人々が、クレオールではなくケイジャン・フレンチを話している」と説明している (Brasseaux et

al. loc. 40-42)。

ショパンに特化した研究者ではないが、ショパン研究の萌芽期である1970年代に南部文学の著書をまとめたスキヤッグスの言葉が、図らずもショパン研究に内在する偏見を言い当てている。

ショパン作品において、クレオールとアカディアンの差異は往々にして想定されるものに過ぎない。初心者が、ある登場人物がどちらのグループに属するのか判断するのは困難な場合がある。現実的な目的のため、他に特定されていない場合には、読者は富める者はクレール、貧しい者はアカディアンだと単純に想定しなければならない。(Skaggs 72)

クレオールにも同じことが言えるが、ショパン研究は表面上ではアカディアンを民族名として用いつつ、その実、階級として扱ってきた。100以上存在する作品のうち、カディアンが登場するものは多いとは言えないが、アンスレーやエスタヴィル、ブラッソーなど、ケイジャン研究が既に確立されている現在、ショパン研究には自らの軌跡を改めて振り返る義務がある。

#### おわりに

本稿では、19世紀のケイジャンの歴史の詳細を辿った上で、ケイト・ショパンによる彼らの表象と、それを読む批評家による解釈を分けて検討し、批評側の問題点を浮き彫りにした。ショパンのルイジアナ作品に登場する、カディアンともクレオールとも呼ばれない人々が一体何者なのかという問題について、ブラッソーのケイジャン・アマルガム概念は大きな示唆を与えてくれる。

貧しいクレオール、アングロ、フランス移民を吸収しつつ形成されていくケイジャン・アマルガムは、当時は未だ特定の名前のつかない多様な人々を包含するまとまりであったはずである。アマルガム創出の背景には、フランコフォビアとプア・ホワイト嫌悪があり、ブラッソーは彼らを、アカディアンにしてもクレオールにしても、民族のリーダーシップを担うはずの層から「見捨てられた」人々だと表現している (Brasseaux 151)。1870年時点のアカディアナの白人人口の54%が潜在的なアマルガム構成要素だったとすれば、残りの4割強は民族の名では呼ばれない「アメリカ人」からアマルガムに極めて近い人まで、こちらもやはり同様に複雑な様相を見せていたはずである。アマルガムという概念は、ショパンが描いたルイジアナは、新しく形成されつつあるケイジャンも含め、従来存在していた白人内の民族が消滅していく過渡期にあり、民族名をつけがたい人々が実際に多数存在していたことを示唆し

ている。

ショパンが民族の印をつけなかった登場人物たちは、そういった人々なのではないだろうか。彼女の描く貧者はケイジャン、クレオールは上流とする批評の前提は、ショパンが実際には描いていたかもしれない、より歴史に忠実な、激しく流動していた南ルイジアナの変化の様相を読者の目から覆い隠してきた可能性が高く、新しいケイジャン研究の知見を容れた広範な読み直しが求められている。

\* 本研究はJSPS科研費JP17K02536の助成を受けたものである。また、本稿の内容は『東北英文学研究』9号（『英文学研究支部統合号』11巻に同じ。2019年1月発行予定）に掲載される「〈私の一冊〉エヴァンジェリンはケイジャンなのか」と一部重複する。

#### Works Cited

- Ancelet, Barry Jean. "Negotiating the Mainstream: The Creoles and Cajuns in Louisiana." *The French Review*, vol. 80, no. 6, 2007, pp. 1235-1255. JSTOR, [www.jstor.org/stable/25480950](http://www.jstor.org/stable/25480950).
- Brasseaux, Carl A. *Acadian to Cajun: Transformation of a People, 1803-1877*. UP of Mississippi, 1992.
- Brasseaux, Carl A., et al. *Creoles of Color in the Bayou Country*. Kindle ed., UP of Mississippi, 1994.
- Chopin, Kate. *The Complete Works of Kate Chopin*. 1969. Edited by Per Seyersted, Louisiana State UP, 1997.
- . "At the 'Cadian Ball." *The Complete Works*, pp. 219-27.
- . "Azélie." *The Complete Works*, pp. 289-97.
- . "Caline." *The Complete Works*, pp. 246-48.
- . "A Gentleman of Bayou Têche." *The Complete Works*, pp. 319-24.
- . "In Sabine." *The Complete Works*, pp. 325-32.
- . "Mamouche." *The Complete Works*, pp. 268-75.
- . "A Night in Acadie." *The Complete Works*, pp. 484-99.
- . "A Rude Awakening." *The Complete Works*, pp. 137-44.
- . "The Storm." *The Complete Works*, pp. 592-96.
- . "Ti Démon." *The Complete Works*, pp. 623-27.
- Elfenbein, Anna Shannon. *Women on the Color Line: Evolving Stereotypes and the Writings of George Washington Cable, Grace King, Kate Chopin*. UP of Virginia, 1989.
- Estaville, Lawrence E., Jr. "Changeless Cajuns: Nineteenth-Century Reality or Myth?" *Louisiana*

*History: The Journal of the Louisiana Historical Association*, vol. 28, no. 2, Spring 1987, pp. 117-40.

Hebert-Leiter, Maria. *Becoming Cajun, Becoming American: The Acadian in American Literature From Longfellow to James Lee Burke*. Louisiana State UP, 2009.

Knipfel, Jim. "The Brooklyn Cajun: Timothy Carey in 'Poor White Trash.'" *The Chiseler*, [circa 2011], [chiseler.org/post/6558011597/the-brooklyn-cajun-timothy-carey-in-poor-white](http://chiseler.org/post/6558011597/the-brooklyn-cajun-timothy-carey-in-poor-white).

Nagel, James. *Race and Culture in New Orleans Stories: Kate Chopin, Grace King, Alice Dunbar-Nelson, and George Washington Cable*. Kindle ed., U of Alabama P, 2014.

Shaker, Bonnie James. *Coloring Locals: Racial Formation in Kate Chopin's Youth's Companion Stories*. U of Iowa P, 2003.

Skaggs, Merrill Maguire. *The Folk of Southern Fiction*. U of Georgia P, 1972.

Toth, Emily. *Unveiling Kate Chopin*. UP of Mississippi, 1999.

Walker, Nancy A. "'Local Color' Literature and *A Night in Acadie*." *Kate Chopin*, edited by Harold Bloom, updated edition, Bloom's Literary Criticism, 2007, pp. 167-90.

# Cajun Myth and Kate Chopin's 'Cadians

Mariko Utsu

As a local colorist of Louisiana, Kate Chopin introduced many characters of Creole and Acadian origins into her works. She does not always specify the ethnicity of her characters, and critics have often made assumptions based on the general notion of Creole aristocracy and Cajun poverty. This paper draws on Carl A. Brasseaux's concept of "Cajun amalgam" to see a different possibility in reading such ethnically unnamed characters.

Brasseaux's *From Acadian to Cajun* (1992) uncovered the details of nineteenth-century Acadian/Cajun history which had been largely misunderstood and mystified. Acadians, like their Creole, French and Anglo-Saxon neighbors in south Louisiana, enjoyed prosperity to the extent that the percentage of planters within them in the parishes on the Acadian Coasts rose to an average of 18.5% in 1860. After the Civil War, the same percentage plunged to 2.25% in 1870. 58% of Acadians were landless then, but the economic hardship was regional, not ethnic; 54% of all white population in Acadiana was in the same situation. Residential proximity among tenant farmers and the common standard of living soon led to a drastic rise in intermarriage prompting the mixture of ethnic cultures and languages, forming a mass of people Brasseaux calls "Cajun amalgam." Meanwhile, the tenacious Francophobia since the Louisiana Purchase became a ruthless attack against French speakers in the wave of nativism in the 1850s. Those who had economic and cultural resources Americanized and passed into the mainstream, and "the amalgam"—Acadians, Creoles, Anglos and French—became the sole target of the rampant discourse of "white trash" until the derogatory label "Cajun" took root at the beginning of the twentieth century.

Chopin lived in and wrote about Louisiana during this historical Acadian/Cajun transition. The state of transition most likely presented a lot of people who were indeed ethnically unnamable to Chopin's eyes. To be sure, her 'Cadians live modest lives, but we do not have to label those who remain unnamed, whether it is Creole or Acadian; Doctor John-Luis in "Mamouche," the Delmandé family in "A Wizard from Gettysburg," the Bordons in "A Rude Awakening" and probably the poor girl in "Azélie," to name a few. The historical presence of "Cajun amalgam" points to the possibility that Chopin depicted the fluid realities of nineteenth-century Louisiana realistically and fairly, and that our critical assumption of Creole aristocracy and Cajun poverty has long hindered it from showing.